

# ボンチ＝ブルエヴィチの政治と宗教

霜田 美樹雄

## 目 次

まえがき

一、ボンチ＝ブルエヴィチのプロファイル

二、ボンチ＝ブルエヴィチの思想

三、ボンチ＝ブルエヴィチの活動

むすび

## まえがき

ヨーロッパにおける国教分離はまず近代における絶対主義国家の形成期に示された。それはローマ法王に対する近代的絶対君主の俗権優位の主張と行動に見られるものであった。言うまでもなくかれらの行動は封建的諸秩序を破壊して新しい生産・文化様式をうち立てんとする新興生産者層に支持されていたのである。一九世紀末から二〇世紀初期にかけてのヨーロッパ諸国での両者の争い、たとへばドイツの文化闘争、フランス左派政権の国教分離、イタリアの政教条約など新しい形式の国教分離はいろいろ特殊な国内事情の存在を認めるとしても、これを、広義に捉えれば

ナショナルな版図内において経済社会を担う世代、生産者層の交替、興亡を否定できない。

近代ヨーロッパ諸国のこのような内的変化、資本主義の発展とその矛盾に基因する諸状況の変化の波紋は後進的な帝政ロシアもまた揺り動かさずにはおかなかった。第一次世界大戦のさなかにおける帝政の崩壊と社会主義政權の樹立はその一証拠である。

ここでは、そのようなロシアにおける諸状況の急変過程においてその変革の一翼を担ったВ・Д・ボンチーブルエヴィチについて、とくにソビエト政權の宗教政策に及ぼした影響を中心として考えて見たい。<sup>(1)</sup>

(1) 本論文の伝記的部分は主として次の二論文にもとずいている。すなわちボンチーブルエヴィチの死去の翌年「宗教と無神論の歴史諸問題」(研究年報)の編集同人 Редакционная коллегия сборников «Вопросы истории религии и атеизма» によってなされた彼の小伝 Ред. «Вопросы», Владимир Домитриевич Бонч-Бруевич (сокращение: Владимир) - в кн., «Вопросы истории религии и атеизма», сб. III. АН СССР, Москва, 1956 とカザン Ю. Я. Козан の次の論文でも Ю. Я. Козан, В. Д. Бонч-Бруевич и научно-атеистическая работа АН СССР (1946—1955), — в кн., «Вопросы истории религии и атеизма», сб. XII, Москва, 1964

## 一、ボンチーブルエヴィチのプロフィール

### 1 歴史的位置づけ

ウラジミール・ドミトリエヴィチ・ボンチーブルエヴィチ Владимир Домитриевич Бонч-Бруевич (1873—1955) は職業的革命家の一員としてロシア革命勝利に貢献し、またレーニン В. И. Ленин の指導の下にロシア社会主義労

働運動の展開でポリシエヴィキ党の基礎を確定した。<sup>(1)</sup>

一八九五年彼はマルキストの戦列に入り以後長くレーニンの親しい協力者の一人として活躍した。<sup>(2)</sup> 彼は一九〇五年革命、一九一七年二月革命および一〇月革命の準備と遂行に積極的に参加した。そして革命後のソビエト政権ではソビエト人民委員会議 *народный комиссариат* の初代官房長官 *Управлющий делами Совета Народных Комиссаров* として若いソビエト国家建設に尽力した。<sup>(3)</sup>

研究者、社会人としてのB・Д・ボンチ＝ブルエヴィチは博学、広汎な科学的関心を示し、革命活動、一般科学、文学、人類学、無神論、宗教活動の諸方面にわたり研究者としてのみならず、該諸科学の普及者として、つまり文筆家として出版家として非凡な才能を有した。

彼は一八七三年モスクワの測量技師の家に生れた。一八八三年に彼はコンスタンチノフスク *Константиновск* 測量学校に学ぶ。

一八八九年学校ストライキに参加して放校され、警察に逮捕されて、クルスク *Курск* に追放された。そこで労働者のあいだに革命思想の宣伝に従事した。<sup>(4)</sup>

一八九六年モスクワの社会民主労働党组织の委任によりB・Д・ボンチ＝ブルエヴィチはスイスのチューリッヒに旅した。そこでブレハノフ *Г. В. Плеханов* の労働解放 *Освобождение труд* 団とつながりを持ち、非合法文書を印刷してロシアに持ちこんだ。そして生れ故郷へかえると逮捕される危惧のある先覚的同志たちに政治的亡命のチャンスを与えた。<sup>(5)</sup> 同年また、かれはマルクスの『経済学批判』の最初のロシア語訳をやりとげ、これを手はじめにマルクス、エンゲルスなど一連の著作を刊行した。

前述の如くスイスへ行きブレハノフの労働解放団に加わったB・Д・ボンチ＝ブルエヴィチは右のようにその出版

活動に関与すると同時に、独学をし、スイス、ベルギーを徒歩で旅行し労働者の生活慣習を研究した。また革命的事件ことにロシアの農民運動に関心を示した。そしてこれを契機として以後宗教セクトに関する調査研究がたゆみなくつづけられるのである。

一九〇三年 РСДРП 第二回党大会において彼はレーニンの委任により宗教セクトの活動について報告をし党の決議をもたらし<sup>(6)</sup>た。レーニンの『イスクラ』*Искра*の発刊とともにボンチールブルエヴィチはその協力者となり、またのち、同年党の分裂にはボリシエヴィキ派の活動に積極的に参与した。

一九〇四年党中央委員会は彼を海外における党の軍事資材および秘密文書の發送主任に任命した。この年末かれはボリシエヴィキ派機関誌『前進 Вперед』の親しい関与者として採用された。一九〇五年一月ボンチールブルエヴィチはロシアは非合法に潜入し、党ボリシエヴィキ派巡回委員会 партийных комитет を司会し、第三回党大会代議員選挙を行<sup>(7)</sup>った。

同年ただちにジュネーブに帰り『プロレタリアー Пролетарии』紙を発行し、ロシアに送りこんだ。

一九〇五年革命のときボンチールブルエヴィチは党中央委員会の召集によりペテルブルグへ行き、そこで『新生活 Новая жизнь』紙の編集者となり、また軍事組織の編成、逮捕された党活動家の脱走組織形成などに関与した。

一九〇六年官憲に逮捕さる。牢獄から出たかれはボリシエヴィキ文献の出版を主要な任務とする党活動に従事した。

一九〇七年ボンチールブルエヴィチは、『生活と知識 Жизнь и Знание』という合法的出版社を組織した。そこで一九〇五年革命後からのかれの活動を継続し、この出版社は一九一七年革命のときまでレーニンの労作をはじめ多数の知識の芽生えを育成した<sup>(8)</sup>。

一九一七年二月革命で帝政崩壊後、ボンチ＝ブルエヴィチは党の委任により、兵士のあいだで活躍し、武装部隊をもってブルジョア新聞印刷所を占拠し、そこからペトログラード労兵代議員ソビエトの「イズベスチャ Известия」紙を編集発行し、<sup>8</sup> またブラウダ Правда<sup>9</sup> 紙にも協力した。

一〇月革命直前まで党中央委員会はボンチ＝ブルエヴィチに<sup>10</sup> 労働者と兵士 Рабочий и Солдат<sup>11</sup> 紙の編集もまかせた。それは大衆を決起にかり立てる党の出版物の一つであった。

臨時政府は彼を有害な人物として逮捕の措置をとったが、かれはこれに先んじてかくれ、革命派兵士の保護の下に新聞発行をつづけた。ボンチ＝ブルエヴィチは一〇月革命の積極的関与者の一人であった。この歴史的事件の日、かれは最高革命軍事委員会 Главного революционного военного штаба<sup>12</sup> の一員であった。ソビエト政権の樹立にあり、レーニンは彼を前述の如くソビエト人民委員会議官房長官に任命した。その職にかれは一九二〇年一〇月までいた。<sup>13</sup>

一九一七年一〇月彼はまた反革命、サボタージュ、諸犯罪と闘うペトログラード委員会の先頭に立っていた。<sup>(9)</sup>

一九一八年二月革命防衛委員会委員として武装労働者部隊 отряды рабочих гвардии を組織した。それは正規軍とともにドニエプル河流域での外国軍の攻撃を撃退した。モスクワへの政府移転後、ボンチ＝ブルエヴィチは人民委員会議での活動とともに、ロシア革命運動に特別の配慮をこめた文化活動をするようになる。<sup>(10)</sup>

彼の尽力でまず、文学博物館 Литературный музей が建てられた。そこにロシア文化、文学上価値ある諸文献が集められたことも特記される。彼はまたトルストイ Л. Н. Толстой 著作全集記念出版国立協議会員の一人であり、プーシキン Пушкин 著作全集出版刊行会の一員でもあった如くこの面にも並々ならぬ関心を寄せていた。

晩年の彼は宗教と無神論の歴史の領域における科学的研究者のソ連科学アカデミー内組織化に尽力した。同アカデ

ミー歴史研究所内、宗教と無神論史部委員として、また科学アカデミー幹部会員として働くとともに、彼自身科学的研究者として宗教および無神論の歴史の諸問題に取り組んだ。彼の尽力で同アカデミーから科学的無神論文庫 Научно-атеистической библиотекы、と研究年報 宗教と無神論の歴史諸問題 Вопросы Истории Религии и Атеизма シリーズの編集と刊行がはじめられ、現代科学の進歩に裨益しているのである。<sup>(11)</sup>

ボンチルブルエヴィチは水水しい若さと不撓不屈の精神をもって、もっぱらこの仕事にうちこんだが一九五五年五月病い重くベットに伏し、七月一四日悲しくも再び彼は立つことがなかった。<sup>(12)</sup>

## 2 彼の活動区分

B・Д・ボンチルブルエヴィチの政治および宗教に対する思想形成とそれにもとづく活動はおおまかにこれを次の五期に分けることができる。

第一期 一八九五年入党時から一九〇五年革命収束時までの党活動および宗教セクト研究

第二期 一九〇七年から一九一七年二月革命までの宗教セクトの研究文学評論、文献蒐集

第三期 一九一七年二月革命から一九二〇年一〇月までの政治活動期

第四期 一九二〇年から一九四五年第二次大戦終結までの文化振興、文献蒐集活動

第五期 第二次大戦後から死亡時までの科学的無神論プロパガンダの期間である。

すなわち第一期においてボンチルブルエヴィチは積極的な党地下活動が光る。周知のように帝政ロシアは革命活動を弾圧迫害したので、これに耐える地下活動には強固な意志と実践力が要請された。彼はそのような党の要請に充分こたえたと同時に、その活動が彼の前半生を輝かしいものにさせた宗教セクトの研究開始の動機ともなったのである。

この資料の調査、作成、文献蒐集がまたのちに彼をしてそれに関連した文学的関心、その文献蒐集に向わせることになるのであるが、とにかく第一期から第二期にかけての宗教セクトの調査研究はそれだけでも彼の偉大な業績と言へよう。そして第二期は一九〇五年革命収束から一九一三年にかけてストルイピン H. A. Грошвин 体制の確立という事態の中でポリシェヴィキはロシアの内外において党活動の苦境に立たされることになるのである。彼は党活動の事実上の先細りの時期においてポリシェヴィキ的立場での宗教セクトの研究、文学的関心への指向に活路を見出し、ていたと言へなくもない。一九一七年二月革命にはじまる第三期は彼の生涯におけるもっとも華やかな政治活動期で臨時政府への抗争活動、政權掌握後の当局者としての活動に寧日がなかった。それは人民委員会議官房長官として、また同時に国教分離布告実施にさいし、司法人民委員部内当局者として花々しい活躍をした。

そのような激務の中でも彼の宗教セクトに対する関心、文学的関心、それに伴う文献蒐集の意欲とエネルギーは断やさなかつたのである。

そして彼が一九二〇年一月ソビエト政權人民委員会議官房長官の職をやめ、政界の第一線を退くにおよんで、これに専心できることになるのである。彼が何ゆえ政界から退いたかこれを詳らかにする資料をいま手許に持たないが、レーニンと親しかつた彼は、一九二三年三月レーニンが病いに仆れて以後活動不如意になるに及んで、いまや完全に政界から隠退することになるのである。

これが彼をして、その後のスターリンとトロツキーの政權争奪戦の渦中にも、また一九三四年からはじまるスターリンの大規模な数次にわたる粛清の嵐にもまったくその圈外に立たせることになるのである。彼はその時期の大部分を国立中央博物館長の職に安坐していた。

こうしてこの時期彼が政争の外にあったことが彼自身にとって幸いであつたか不幸であつたかはわからないが、生

命ながらえて晩年の無神論プロパガンダを展開させ得たことはソ連邦の近代化についての一つの礎石を与えたこと、それはまた彼の祖国ソ連邦にとってプラスであったことはたしかである。

周知のようにスターリンは独ソ戦 *Великой Отечественной войны* にはじまる第二次大戦の参戦で国内における宗教および宗教組織に対してなされた、いままでの政策を余儀なくいわゆる宗教懐柔政策に転換せざるを得なかった。<sup>(13)</sup> 第二次大戦の終結後、宗教政策は戦後の状況に照応して新たな方針の樹立が迫られた。<sup>(14)</sup> その一つとしての無神論プロパガンダのボンチールブルエヴィチによる展開は見逃すことができないであろう。

いずれにしても、第一次と第二次の両世界大戦、国内的には一九〇五年革命、一九一七年二月と一〇月の三つの革命に際会した彼の生涯はやはり波瀾、起伏をきわめたものであり、またその活動は多彩であった。

しかしその活動の基礎となる彼の思想は多くの風波に耐えて不思議と一貫しているようである。そこでまず、ここでは彼の思想、ことに対宗教観を一べつしたのち、それをベースとした彼の主要な諸活動、宗教セクト研究活動、文献蒐集活動、無神論プロパガンタなどについてふれて見たい。

- (1) Ред. В. И. Р. А. Владимир Дмитриевич Бонч-Бруевич (сокращение: Владимир)-в кн. Вопросы истории религии атеизма, сб. III, АН СССР, Москва, 1956, стр. 3
- (2) Нибелт大百科辞典では一八九二年に入党したことになっている *Большая Советская Энциклопедия*, вт. изд. том. 5, Москва, 1950, стр. 563
- (3) Владимир, Там же.
- (4) Там же.
- (5) Там же, стр. 4



- (6) В. Ф. Зыковец, Программы положения КПСС в борьбе против религии—в кн., Вопросы истории религии и атеизма, сб. XI, Москва, 1963, стр. 30
- (7) Вадимир, Там же, стр. 5
- (8) Там же.
- (9) Там же.
- (10) Там же, стр. 6
- (11) Там же.
- (12) Ю. Я. Козан, В. Л. Бонч-Бруевичи научно-атеистическая работа АН СССР (1946-1955),—в кн., Вопросы истории религии и атеизма, сб. XII, Москва, 1964, стр. 21
- (13) William B. Stroyen, Communist Russia and the Russian Orthodox Church, 1943—1962, Washington, 1967, p. 35
- (14) Robert, Conquest, Religion in the U. S. S. R., New-York, 1968, p. 34

## 二、ボンチ＝ブルエヴィチの思想

### 1 信仰の自由

彼には宗教セクトの調査研究という巨大な業績があるが、それ以外にも前述の如く多彩な才能を駆使して文学、人類学などに興味をもち多数の評論、随筆を物しているが、いま宗教、無神論関係について考えて見ると「ロシア教権主義の諸勢力 Силы русского клерикализма」(一九〇三)<sup>(1)</sup>をはじめ力作数編に及ぶ。これらの論述を一貫して流れていることは信仰の自由を如何にして確保するかという問いかけであり、模索であった。

いま一九一七年三月二二日「ペトログラード・イズベスチャ」紙にのった彼の論文を見よう。これは二月革命直後の政局混沌としたときにこれに関するボリシエヴィキの態度を表明するものでもあった。すなわち当然な権利の一つ

として、各人の信仰の自由があげられる。国家はわれらに次のような秩序のなかに落着かせねばならぬ。そこでは彼がどのようなものも信仰することができるし、またどのようなものも信仰しなくてもそれらの信念を妨げることはできない。法律にこのようにそれぞれの信仰の自由を充分に確保しなければならないことのほかに、われらのすべてが信仰しない自由も確保されねばならぬ。<sup>(2)</sup>

ほんらいの宗教は人間の個人的私事でなければならぬ。人人の生活の面で……どのような教会、宗教、儀式も国家や権力と結合さるべきでなく、そのようなたちで維持さるべきでない。<sup>(3)</sup>……国庫は一コペイカたりとも教会に支出してはならぬ。一人の司祭職といえども自己の活動で権力機関から金銭の扶持をうけてはならぬ。一般に教会は国家から完全に分離さるべきであると、臨時政府の優柔不断に活を入れたものである。ソビエト政権樹立後国教分離布告をはじめ一連の宗教政策の実施はこの見解に沿ったものだが、何ゆえそれが信仰の自由につながるかについて、一九三〇年に当時の革命を回顧して曰く、……人人の憎悪をになった国家的正教会の聖職者たちが一〇月ポリシェヴィキ革命で仆れ、国教分離布告の必要性を表明したのは当然のことであった。かれらはプロレタリア革命になにほどの敬意も払わないばかりか、それを露骨に人民の敵呼ばわりしたのであった。<sup>(5)</sup>……このどんな欲な当代寄食者 *милых захребетник* をたんに社会的制度からだけでなく、正教聖職者の有害な影響が及ぶ他のあらゆるものから放逐することについて注視するものである、と。<sup>(6)</sup>

プロレタリア独裁政府はだが次のことを明白に表明した。正教も他の宗教も信仰することは自由であるが、それは国家的法令のわくの中であり、またどのような程度においても政府が維持するものでない私的機関として存するものである。<sup>(7)</sup>

教会のプロパカンダは法の範囲内で許される。そしてそれとやらんで何も信じないこと、麻薬と闘うための反宗教

宣伝も許される。<sup>(8)</sup>

ポンチ＝ブルエヴィチにとって信仰の自由は社会主義社会において具体的にどのようなメルクマールを持つべきかは第二次大戦後においても変わらない。彼の一九五四年の論文によれば、……レーニンが示す如く宗教はロシアの労働者党にとって私事であり得ないという立場から、宗教は国家にとって私事であり、国家はすべての信仰を保証せねばならないという РСДПР 第二回党大会（一九〇三）での宗教政策が議決されこれらの諸要求が一〇月革命の勝利によって実現されたのである。

すなわち信仰自由の確実な保証される重要な条件として国家から教会の完全な分離があるとする。資本主義国においては宗教を人民の精神的意識混濁と隷属化の道具として利用する点で支配的ブルジョアジーが利害関係をもつ結果として、完全分離はまだ一日も実現されていなかった。<sup>(9)</sup>

ロシアにおいては政治的、社会的、私的生活に影響を与へ、地主、資本家、ツァー帝政政治の道具であり支柱であったところのものが根絶されたのである。

帝政ロシアのギリシヤ正教会は言うまでもなく独占的地位を占め、国家装置として作用したし、他の宗教的見解を抑圧した。それはただ自由思想とか無神論を迫害したのみならず、他の宗教セクト、国家の活動に対しても及んだのである。<sup>(10)</sup>

それは学校、病院、慈善施設などを介して信徒の上に巨大な影響を与え、また講壇、説教台を通じて反動的知識のあくことなきプログラムを展開していたのである。<sup>(11)</sup>

国教分離布告により支配的な教会の他への迫害はとまり、すべての教会、宗教組織は権利においてまったく平等になり、それらはまた国家ではなく、かれら信者たちが維持する私的団体 частный общество になったのである、と。

つまり彼にとつての信仰の自由とは信仰に対する国家権力の完全な排除であり、近代自由主義諸国における国教分離と本質的にことなるとするものである。これは帝政ロシアにおける国教の病理的癒着への当然のアンチテーゼとして帰結されるものであらう。

## 2 宗教的偏見について

このような信仰の自由を個々人にどのように徹底させるか、つまりある宗教を信仰している者にどのように対処するかは次の問題である。

彼は言う。一九一九年レーニンは第八回ロシア共産党大会 PKII (6) において宗教に対する党の態度および宗教的偏見と闘う党の課題の問題について党プログラム案を提起し、それが党方針として決定された。<sup>(12)</sup>

それによると、党の宗教への態度は既に国家から教会、教会から学校を分離する布告発布で満足するものでない。

……党はすべての大衆の社会経済的活動の計画性と自覚性の実現で、宗教的偏見がそれ自身枯死することを招来するよう確信をもつて指導するものとする。党は宗教的偏見から労働大衆の事実上の解放を促進し、かつ広汎な科学的啓蒙と反宗教プロパガンタを組織化するため搾取階級と宗教プロパガンタ組織者との関係を完全に破壊することを志向する。<sup>(13)</sup>

これに伴つて必要なことは、その遂行にあたり、信者の感情を侮辱するようなあらゆることを注意深く回避することであり、ただ強固な宗教的狂信に対してだけ主動的に闘わねばならぬとした。

つまり宗教的偏見との闘いにおける有害な誤った方法の採用を警告したのだ。その克服はつねに政治的に熟練した、かつ長期にわたる活動で大衆を啓蒙するにある。<sup>(14)</sup>

すこしさかのぼって一九一八年第一回全ロシア婦人労働者大会においてレーニン曰く「宗教的偏見との闘いは非常

に用心深くやらねばならぬ、宗教的感情に対する侮辱をこの闘争にもちこむことは多大の害毒をもたらす。宣伝、啓蒙という方法で闘うべきである。闘いのやり方を激烈にすることによってわれわれは大衆の憎悪を買うおそれがあり、このような闘争は統一こそわれらの力であるのに宗教上の原理によって大衆の分裂を強めてしまう。宗教的偏見のもっとも深い根は貧困と無知であってわれわれはこの害毒と闘うべきである。<sup>(15)</sup>

つまり侮辱するのでなく人の意識を説得するのであり、おくれた大衆に宗教問題に対する意識的態度と宗教の意識的批判に対する関心を抱かせる能力をもつことであると。<sup>(16)</sup>

スターリンもまた宗教的プロパガンタの問題についてキリスト教徒の偏見に対して用心深い態度をとることを求めた。<sup>(17)</sup>

同じことは一九二三年四月の第一二回党大会における「反宗教指導とプロパガンタの扱い方について О постановке антирелигиозной агитации и пропаганды」という決定で、重要な分析と解釈もしないで、信仰と礼拝を嘲笑するような無神論プロパガンタの故意に粗野な方法の採用を徹底的に非難した。そしてこのような方法では宗教的偏見から勤労大衆が解放されるにつきとまどうとした。<sup>(18)</sup>

さらに、全ソ連邦共産党ポリシエヴィキ中央委員会 ЦК ВКП(б)が一九三〇年三月一五日公布した「コルホーズ活動における党路線歪曲との闘いについて О борьбе с извращениями партии в колхозном движении」という決定には次のように示された。住民の社会的自然発生的要望があらわれたとき行政手段による教会閉鎖の実施を廃止す。ただし、それが多数住民の虚偽歪曲されたものであるとき、地方ソビエト執行委員会の決定により教会閉鎖はつづけられる。信者の宗教的威信を侮辱する態度の敵対的嘲笑について厳格な処罰あるものとす。<sup>(19)</sup>

このように粗野な方法は科学的無神論プロパガンタが勤労者教育の党活動の一部であり、党はいつもプロパガンタ

の正しいポーズを要求し、宗教的残存物克服への闘いの面で、これらの措置を決定的に非難するという考えである。ソビエト政権と党に対する宗教と教会の態度がソビエトと外国に二枚舌的虚構をする限り、弾圧が向けられよう。なんとすればそれは真の信仰自由の防禦に立っているからである。

### 3 現代ソ連邦と宗教

現代ソ連邦における政府側の宗教および宗教組織に対するいわゆる宗教懐柔政策、別言すれば一種の友好的態度について検討してみよう。

彼によれば、このような態度の転換は直接的には独ソ戦の突発に起因すると言う。

……すべての人民は攻撃する恵がしい残忍な敵から自己の社会主義の母国を守るために立ち上った。国家への巨大な愛国心の高揚を考えてギリシャ正教およびその他の宗教指導者たちは攻撃してきたファシスト侵略者から母国を擁護するよう信者にアピールし、戦線統後の諸欠亡につき信者のあいだに募金活動を組織化し、勝利達成の方向にむけてソビエト政権の政策を支持したことはじまるとする。平和へのソビエト同盟人民の解放を考えたソ連邦における各種宗教指導者たちは第二次大戦後も平和を推進するため積極的に働いた。<sup>(20)</sup>

これが両者の友好的態度の発展経過であるとする。このような見地から以後両者の関係は次のようになった。

一九四三年まで宗教組織に関する実際的諸問題の解決についてはソ連邦内のロシア共和国ソビエト最高会議幹部会祭典部委員会 *комиссия по делу культа* が管掌していたが、同年末ギリシャ正教問題理事会が設立され、翌年ソビエト連邦大臣官房内宗教儀典理事会 *совет по делу религиозных культов* が新設され所管することとなった。

この理事会は教会側が提起した問題およびソ連邦政府が解決を求めている問題について先決審議するもので両者の円滑な連係を実現するにある。<sup>(21)</sup> それはギリシャ正教はじめすべての宗教組織にかかわる、宗教問題の法律、決定や訓

令など政府の提案にあたり事前審議、およびそれら施行のさい時宜を得て実施されたか否かの観察、政府への交渉を求める問題について教会側への協力、助成、教区団体と地方ソビエト機関との相互関係に異常が発生したときその異常性の回避など、憲法に宣言された信仰の自由をソビエト同盟市民に実現するにつきあらゆる障害を回避する必要手段を講ずる。<sup>(22)</sup>

現在（一九五五）ソ連邦には数千のギリシャ正教の教会と祈禱堂があり、同じく他の宗教のそれがある。これは多数の信者が未だ存在することを裏付けるものであり、しかるがゆえにその人人の信仰の自由を確保する前述の手段が講ぜられる訳である。<sup>(23)</sup>

もちろん、だからと言って宗教信者が増大しているわけではなく、革命前のそれと対比したときその数の激減は顕著なものがある。それは巨大な大衆が社会主義建設において、宗教からはなれた科学的知識のプロバガンタ、学校教育、文化施設の建設の成果であると説明することができる。<sup>(24)</sup>

また、特につけ加えなければならないことはソ連邦の現在の状況、宗教および宗教組織に対するいわゆる友好的態度は、言う迄もなく宗教を奨励助成せんとする意図に出でたものでなく、われわれは矢張り宗教に対して次の立場を堅持するものである。すなわち、宗教は現在において人人のつくった資本主義の残存物であり、それは他の残存物とともに社会主義前進期において、反動的勢力として現われるものである。

われらはマルクスが宗教は人民の阿片なりと言ひ、レーニンが聖なる火酒の下で、宗教的思考は人を毒し、催眠させ、にぶらせ、いやしめると言った言葉を決して忘れなかったし、これからも忘れることができないであらう。<sup>(25)</sup>

- (1) В. Д. Бонч-Бруевич, Там же. стр. 9
- (2) В. Д. Бонч-Бруевич, Отделение церкви от государства, (статья опубликована в газете "Известия Петроградского Совета рабочих и солдатских депутатов" Но. 13. 22 марта 1917 г.) (сокращение : Отделение)—в кн., Научно-агенистическая библиотека, Деятели Октября о религии и церкви, москва, 1968, стр. 12
- (3) Отделение. Там же.
- (4) Там же.
- (5) В. Д. Бонч-Бруевич, Роль православного духовенства в первые дни октября, (статья впервые напечатана в книге "На боевых постах Февральской и Октябрьской революций", москва, 1930.) (сокращение : Роль)—в кн., Деятели, Там же. стр. 14
- (6) Роль, Там же.
- (7) Там же.
- (8) Там же. стр. 15
- (9) В. Д. Бонч-Бруевич, Свобода совести в СССР (сокращение : свобода).—в. кн., Вопросы истории религии и атеизма, сб. II, москва, 1954, стр. 13
- (10) Там же. стр. 14
- (11) Там же. стр. 15
- (12) В. И. Ленин. соч. т. 29, стр. 90 邦訳・レーニン全集第二九卷一一四頁
- (13) Свобода, Там же. стр. 15
- (14) Там же. стр. 21
- (15) В. И. Ленин, Соч. т. 28, стр. 161 邦訳・レーニン全集・第二八卷・一八七頁
- (16) Там же. Т. 33, стр. 204 邦訳・三三三卷・一一三〇頁
- (17) И. В. Сталин. Соч. Т. 6, стр. 30
- (18) Свобода, Там же. стр. 21
- (19) Там же. стр. 22 и Зыковец, Там же. стр. 31



- (20) Соболева Там же. стр. 25
- (21) Там же.
- (22) Там же. стр. 26
- (23) Там же.
- (24) Там же.
- (25) Там же.

### 三、ボンチ＝ブルエヴィチの活動

#### 1 宗教セクトの研究活動

ボンチ＝ブルエヴィチの科学的労作の多くの領域はロシア宗教団体活動の研究にそがれた。彼がはじめたその歴史は過去一世紀に及び、ロシア民族の宗教活動の観察を歴史的人類学的になしとげた。

この領域を科学的に研究することに興味をもちはじめた動機について彼は次のように回想している。……私は一八九七年以来農民のあいだに伝播している宗教セクト活動 *сектантския движения* といわれるものに、それが農民運動の一つの様相を示すものであるがゆえに関心をもった<sup>(1)</sup>……と。この関心はブレハノフの好意と援助をつないだ。そしてブレハノフは社会的政治的経済的に深く矛盾したロシア帝政制度下にある宗教セクト活動の入念な研究をするこの必要性をのべた。やがてロシアにおける政治的諸事件はボンチ＝ブルエヴィチをして宗教的形態で帝政制度に敵対抗議をあらわしたこの宗教セクト（農民運動）の指導者と直接かつ長い交際をなすに至る<sup>(2)</sup>。

一八九九年は帝政制度下の権力者側は宗教セクト信者に対するもっともきびしい弾圧の頂点に達した。宗教的にギ

リシヤ正教を独占的に援助する帝政政府は何千という宗教セクト信者をさいしょコーカサスへ、のちにその他国外へ追放した。

ボンチルブルエヴィチは追放されてカナダへ移住する宗教セクト信者団に同行した。そして毎日セクト信者と交際しているうち、かれらの口述からその性格、慣習など重要な資料をふかくきわめ『流浪記 Животной книг』をあらわした。これは革命前まで、それについて歴史的人類学的労作の一つであり、この中にはただかれらの慣習、習俗のみならず、聖歌とか古代人の問答集など収められているもので、セクト信者の社会的倫理的宗教的見解の性格描写に重要な意義をもつ貴重な研究である。<sup>(3)</sup>

ボンチルブルエヴィチは『流浪記』だけでなく、一九〇〇〜一九〇二年にかけて『自由言論 свободное слово 社から』ロシア・宗教セクト信者の歴史的研究資料 Материалы к истории изучения русского сектанства』という六冊からなるシリーズものを出版した。これはセクトの宗教活動を歴史的に理解する労作である。

ロシアにおける宗教団体活動史の面におけるボンチルブルエヴィチの研究は非常な科学的熱情と環境で行われただけでなく、それは農民大衆のイデオロギーのプロテストと農奴制、専制政治に敵対するすべての農民運動の経過との関連で研究したのである。<sup>(4)</sup>

ボンチルブルエヴィチのこれに関連した他の重要な業績としてはロシア社会民主労働党 РСДРП 第二回大会における「ロシアにおける分離派 раскол とセクト сектанство」という報告にあらわれている。

これは前述の彼の研究から当然に由来することであって、そこではロシアにおける異端派 ересей 旧正教派 старобрядчество、セクトの思想、世界観、起源、社会的政治的役割についてコンパクトに記した論調は同党のかれらに対する働きかけの路線をきめたものであった。

すなわち、ロシアにおける宗教セクトの活動は現在の社会様式に敵対する多くの民主的風潮、方向の一つの現われであるとの判断から第二回党大会ですべての党人は宗教セクトへの働きかけを配慮して、社会民主主義者に引き寄せ、変更させることを、ボンチ＝ブルエヴィチの報告の結論となった提議を借りて決議するとした。<sup>(5)</sup>

これを要するに、ボンチ＝ブルエヴィチにとって宗教セクトは圧倒的に優勢な国家的支配的ギリシャ正教会に迫害される宗教活動であり、それはとりも直さず一種の被圧迫農民の農民運動として把えることができたものであった。彼がこの研究を社会民主主義の展開のため推進したことは意義がある。

## 2 文化的関心

ボンチ＝ブルエヴィチは文学の諸問題にも興味をもち、著名な文学者たちも文通交友したり、評論を書いたり、またこれら出版活動もなした。

かれはトルストイ Л. Н. Толстой、コリキー П. Горький、ツェン＝シビリヤク Д. Н. Мамин-Сибиряк、フランコ И. Я. Франко、コロレンコ В. Г. Короленко、ベドノフ Д. Беднов などの文学への造詣と関心を強め、そしていろいろの新聞雑誌その他に多くの評論をものした。たとえば「プーシキンの詩の市民的契機」[Гражданские мотивы в поэзии Пушкина]、「プーシキンとデカブリスツ」[Пушкин и декабристы]、「来るべき社会主義への戦士」(唯物史観の戦士としてのチュルヌイシェフスキー Н. Г. Чернышевский)、「チュルヌイシェフスキーと女性問題」[Тщательный просмотр]、「マキシム・ゴリキー Максим Горький による告発」などをはじめ多くの評論はかれが文学的領域にも並々ならぬ関心があったことを示した。<sup>(6)</sup>

つかれを知らぬ意欲をもってロシア文学を人民大衆の財産にし、人民の文化的水準を引き上げ、発展させることにかれの興味と関心をそそぎそれがまた終生変らなかつた。

ボンチールブルエヴィチはまたロシア社会の古代思想文献の収集およびこの文化的遺産の研究にエネルギーをそそいだ。

彼はセクト信者調査の続編として一九〇九年まで他に七巻の「資料」を出版したのみならず、同年より一九一二年まで、コーカサス方面セクト住民の風俗慣習を調査研究し、文献学的正確さをもつそれらの手写 *Рукописей*、写真 *фотографий*、口頭メモの文献など多数の資料を帝室科学アカデミー Императорской Академии 筆写分室に寄贈した。<sup>(7)</sup>

ソビエト政権樹立後の一九二〇年ソビエト人民委員会議官房長官の激職のときも、彼は文学、科学、芸術などの古代文献収集を忘れず、また同年「生活と知識」 коммунист (のち国立出版所) の出版主任をし、さらに国立トルストイ博物館長であった彼は中央文学博物館 Центрального музея литературы 設立の構想を忘れなかった。

一九二九年〜三〇年、彼は教育人民委員部から古文書文献研究のためおよびロシア作家資料、古いロシア出版物筆写についての科学的作業のためチエコ・スロバキアとドイツに派遣された。この旅行の結果、ロシア文学史にとって多くの価値ある資料を獲得した。<sup>(8)</sup>

さて、ボンチールブルエヴィチのイニシアチブで中央文学博物館設立委員会が組織され、一九三二年七月同博物館が設立され、かれはそれから一九四〇年まで国立中央文学博物館長の座に在職しているあいだ、芸術、文学、評論など筆写、描写の資料をはじめ稀覯本、自筆本など一八一一九世紀ロシア文学史の充分な資料として三二〇万点以上の古文書を収集したことは彼の功績と言えよう。とくに注目すべきはプーシキン А. С. Пушкин ツルゲーネフ И. С. Тургенев トルストイ Л. Н. Толстой ゲルツェン А. И. Герцен オガレフ Н. П. Огарев カラムジン Н. М. Карамзин チョトチュフ Ф. И. Тютчев ネクラノフ Н. А. Некрасов サルッコフ Ш. Ч. Щадриин М. Е. Салтыков

-Щедрин スホフニコビリン А. В. Сухов-кобылин Канчаров И. А. Гончаров など多数の作家詩人たちの作品であった。作家、詩人、芸術家などの貴重な文献本、版画、ユニークな肖像画、大量の蒐集絵画、石版印刷、美術図鑑、一八世紀の新聞、外国の革命的出版物など彼の広汎な活躍で見つけ出し保存された。

現代社会の財産とするための資料の蒐集と同時に彼は彼自身の目標の実現に向ってつき進んだ。<sup>(9)</sup>

一九二八年ソビエト人民委員会議はポントニブルエヴィチをトルストイ生誕一〇〇年記念式典実行委員会代表として、その準備のためドイツ、チェコ・スロバキア、フィンランド派遣を命じた。それより前の一九二六年彼はトルストイ著作全集記念出版編集のため国立編集委員会委員になり、ほぼ二五〇〇編からなるそれをまとめた。かれはまた偉大な詩人の死後一〇〇年を機に全ソビエト・プーシキン展覧会組織委員会の作業に関与し、その著作全集出版主任となる。<sup>(10)</sup>

### 3 科学的無神論プロパガンダ

晩年のポントニブルエヴィチは多くの時間を割いて無神論の科学的研究体制の樹立というきわめて重大な仕事に自己の巨大な博学とつきぬエネルギーを彼の死に至るまで注ぎこんだ。

すなわち一九四七年ポントニブルエヴィチはソ連邦科学アカデミー内に宗教と無神論の歴史部会設立のイニシアチブをとり、一九五三年その専門部会の委員長となった。彼が主宰したこの時期の部会はただ単にアカデミックな国家的研究組織の唯一のものであるだけでなく、宗教と無神論、自由思想などの歴史に関連した一連の問題に興味をもてる独特の企画でもあった。<sup>(11)</sup>

科学的協力者の少なからざる共同作業で国教分離布告資料集、ロシアにおける改革的宗教社会活動、革命前のロシア教権主義、ロシア自由思想史、ロシア回教歴史史料、現代カトリックなどを出版した。

ボンチールブルエヴィチは無神論研究ではもつとも広汎な共同作業が緊要と考えており、またそれゆえにこそ過去現在に関連する多様な問題を理解することができる。この科学的研究なしでは深い信念をもって無神論プロパガンタの推進をいくらかでもすることはできぬとした。<sup>(12)</sup>

ボンチールブルエヴィチは特に大いなる試みとして一九五〇年に困難ながら次のものの準備を行った。すなわち『宗教と無神論の歴史諸問題 Вопросы истории религии и атеизма』という論文選集年報の編集と刊行であった。この本の編集はこの部会の協力者を土台とし、また著名なソビエト歴史学者が重要な地位を占めた。たとえばアカデミー会員ヴィベル Р. Ю. Виппер ミノヴィチ А. Б. Равович アニシモフ А. Ф. Анисимов のほかブルノー Лжордано Бруно ロジチニム В. С. Рожницким などであった。この本は人民民主主義諸国において科学的社会的何たるかに関心をもたせたものであった。<sup>(13)</sup>

彼はこの選集の性格は次のものであるとした。すなわち、いろいろの資料の反宗教プロパガンタを大衆にわれらが与えるためには、まず、無神論プロパガンタの、歴史的に徹底的に研究するに役立つようなもの、そしてそれらの文化の発達に、宗教的残存物の克服という困難な作業とその扱い方の多くの方法に役立つものでなければならないとした。<sup>(14)</sup>

同時にかれはこの選集年報がソビエト宗教と宗教組織の歴史、無神論イデオロギイの研究に相応の貢献を与えうること期待するしそれなしには真にそれらの歴史過程をあきらかにすることは不可能であろうと強調した。

そして彼はこの選集年報出版をできる限り育成しようとする力とあらゆる尽力をした。<sup>(15)</sup>

ボンチールブルエヴィチは次にソ連邦科学アカデミー歴史研究所で、科学的無神論文庫 Научноатеистической библиотеки を刊行しようと考えた。

彼がこの考えを固めるに至ったのは一つの古いエピソードがある。それは一九一七年六月から七月初めにかけてペトログラード近傍のネイバル *Neibaur* 村にいた彼のところへレーニンが客として滞在していたときのこと、彼は次の目論見をレーニンに話した。それはすべての宗教理論の信頼すべき批判を行い、とくに正教聖職者の腐敗を曝露するところの科学的であるよりも大衆的な反宗教文献刊行の目論見につきレーニンと詳細に話し合った。レーニンはこれにきわめて賛意を表し、フランス革命期の唯物論者、無神論者の作品から選択をはじめるのがよいこと、またボルテールのカトリック主義への嘲笑と愚弄は神に関する馬鹿げた知識、永年にわたってすべての階級、住民に定着した宗教的毒気から人間の思考力を消毒するに有用であるとした。<sup>(16)</sup>

これに対しボンチ＝ブルエヴィチは宗教的欺瞞、ほんとでもない奇蹟、聖職者の説く詭計、墮落掠奪などなんとかして広汎な人人に曝露するため通俗的新聞によって、また聖書の素性、宗教史、宗教裁判などの宗教問題のまじめな科学的研究を、科学的諸論文の選集によって、このようないろいろの読者に計画的に行う必要ありとした。<sup>(17)</sup>

一九五四年夏、科学アカデミー『科学的無神論文庫』につきソ連邦科学アカデミー幹部会で全面的賛成を得て刊行をはじめたことにつき、ボンチ＝ブルエヴィチは科学的無神論プロパガンダに関するレーニンの教えの一つを計画的に実行できて大いに満足だと語った。

この文庫の編集刊行は彼の死後も中止されないばかりか一九六三年まで一六冊<sup>(18)</sup>、一九六九年まで四五冊を刊行している。<sup>(19)</sup>

ボンチ＝ブルエヴィチは科学に対峙し、敵対する宗教は宗教的非開化主義の終焉までそれと、そこでもしソ連邦科学アカデミーがそれをしたければ、進歩的科学的思考を軸として、すべての宗教形態、宗教世界観の批判の徹底的研究を集中化できるのはだれであろうか。この任務はただ単に独自の構想でアカデミック機関が個々に行うのではなく、

なんらかの程度においてすべてのアカデミックな研究所、機関が連係するのでなければならぬ。<sup>(20)</sup>

この見地から科学的無神論プロパガンダが、プロパガンダ要員の充分な準備教育と責任体制の不明確な方法でいまだ遂行されてきた誤りにもとずき、その効果において失敗していることをはっきりさせたのである。

それは一九五四年七月七日ソ連邦共産党中央委員会の「科学的無神論プロパガンダの大いなる欠点と改善方法について」および同年十一月一日「住民のあいだに科学的無神論プロパガンダ実施の誤ちについて」という二つの特別決定に強調される。<sup>(21)</sup>

この決定にもとずき、彼は科学アカデミーは無神論の面についてもっと広汎な活動をもって党文書の方針に答えねばならぬとの結論に達したのである。

同年一月三〇日彼はソ連邦科学アカデミー幹部会の「アカデミー諸機関で科学的無神論プロパガンダを強化することについて」の決議を行わせ、その準備のためかれは活発に関与した。<sup>(22)</sup>

決議は科学アカデミーのすべての部門が早急に科学的無神論プロパガンダに就て研究所が関与すべき具体的プランをきめることを求めた。それは学術的研究プランをはじめ補助的には無神論諸問題の通俗的書籍の書き方、読書、公開講座などのプランを含めていた。決議はまたこの問題研究のメンバーに若い研究補助員 аспирант 研究員 докрант<sup>(23)</sup>を科学アカデミーに引きよせよく熟練した反宗教専門家に養成することをきめた。<sup>(23)</sup>

科学アカデミーは右の成果を挙げるためどのような体制を樹立したらよいか。

ボンチーブルエヴィチによればそれは宗教と闘う共同委員会 координационная комиссия の設置である。科学的無神論プロパガンダを展開するため科学アカデミーが、人文諸科学、天文学、物理学、地理学、生物学など自然科学が連係して研究することであると。<sup>(24)</sup>



科学アカデミーはこの方策実施のため人文科学、自然科学の代表者たちによる共同委員会をつくり、学問研究についての相互の連絡調整をはかることになり、同委員長にボンチ＝ブルエヴィチが任命され、全アカデミーの規模で無神論活動を機能的に組織化することがはかられた。<sup>(25)</sup> 彼はこの重要な党の課題に答える新しい任務に対して彼の生命のさいこの数ヶ月を捧げたのである。<sup>(26)</sup>

- (1) Владимир, Там же. стр. 7
- (2) Там же.
- (3) Там же.
- (4) Там же. стр. 8
- (5) Зыковец, Там же. стр. 30
- (6) Владимир, Там же. стр. 10
- (7) Там же. стр. 8
- (8) Там же. стр. 12
- (9) Там же. стр. 13
- (10) Там же. стр. 14
- (11) Ю. Я. Козан, Там же. стр. 12
- (12) Там же.
- (13) Там же. стр. 13
- (14) Там же. стр. 14
- (15) 。

この研究年報は一九六四年、第二二巻まで刊行されたが、その研究主体たるソ連邦科学アカデミー歴史研究所 Институт истории религии и атеизма の宗教と無神論研究部会が発展的に解消され、歴史研究所とは別個に科学的無神論研究所 Институт научно-атеизма が設立された。そのスタッフによって一九六六年以降『科学的無神論の諸問題 Вопросы научного атеизма』と

こう研究年報が年二回宛行され、一九七〇年現在第一〇巻まで出ている。

- (16) Ю. Я. Козан, Там же. стр. 15
- (17) Там же.
- (18) Там же. стр. 17
- (19) 『科学的無神論文庫』第三九冊目はこの叢書刊行のイニシアチブをとったボンチルブルエヴィチはか革命前後に活躍した三人の諸著作のエッセイが登載されている。なお、この文庫の刊行元は歴史研究所から、現在は科学的無神論研究所に変わっている。なお、四五冊目は「レーニンの無神論」
- (20) Ю. Я. Козан, Там же. стр. 17
- (21) Там же. стр. 18
- (22) Там же.
- (23) Там же.
- (24) В. Д. Бонч-Бруевич, О научно-атеистической пропаганде, 1955 (сокращение: Научно), — в кн.: Вопросы истории религии и атеизма, сб. XII, 1964, стр. 9
- (25) Там же. стр. 10
- (26) Ю. Я. Козан, Там же. стр. 18

## む す び

われらの努力はソ連邦の広汎な労働大衆の心に科学的唯物論世界観をうえつけ、宗教的反動主義者との闘いにおいて多くの労働者の意識をわれらに引き寄せるにある。すなわち、社会主義イデオロギーに敵意をもつ宗教世界観との闘いにおいて団結したすべての科学的諸勢力が精力的にその目標に向う必要がある。<sup>(1)</sup>

これは一九五五年三月ソ連邦科学アカデミー無神論活動共同委員会委員長として彼が示した論述の一節で宗教遺物

克服のための科学的研究の意義をよく特色づけているものである。

それから僅か四ヶ月後、彼の死の到来するその直前まで、彼は無神論研究体制の整備のため余念がなかった。

今年七月一四日、彼が心魂を傾けた研究体制整備が軌道に乗り、前進をはじめたとき彼はこの世を去ったのである。

アカデミー会員タブチェフ A. B. Толчев は彼の葬儀での弔辞で、彼は偉大な科学者であり、また科学的組織活動家であった<sup>(2)</sup>とのべ、またアカデミー会員バルディン И. П. Бардин は彼の晩年の生活について、科学アカデミー機関で、科学的無神論プロパガンダを発展強化させるため多くのことをなしたとげたとし、この面における彼の偉業が持続され、増大されるがため配慮することはわれらの責務であると述べた<sup>(3)</sup>がまことに首肯しうる評価であろう。

そしてそのような晩年の活躍を彼に与えたところのものは言うまでもなく、彼の前半生の党地下活動における苦闘の経験である。そこから宗教的セクトの研究への端緒をつかみ、それにより、信仰の自由の何たるかを模索したのである。

一九一七年一〇月革命後のソビエト政権で人民委員会議官房長官職在位は彼の所信を実現できる好機でもあった。

彼は一九一八年一月二三日のいわゆる国教分離布告発布にも参画したのみならず、その布告徹底実施のための諸施策の検討および組織化につき、熟練エキスパートの一人として長官在位のまま、関与した<sup>(4)</sup>。それは一九一八年四月九日の人民委員会議で、右布告実施方が司法人民委員部に委任され、同委員部内に布告実施の担当局が同五月九日新設されたとき<sup>(5)</sup>司法人民委員部委員クラシコフ П. А. Красиков およびレイスネル M. A. Рейснер モギンフスキー С. Г. Могилевский などそうそうたる専門家とともにその部員に兼任されたのである<sup>(6)</sup>。

かれらの努力は同年八月二四日示達の「布告実施についての司法人民委員部訓令」に開花するのであるが、とくにボンチルブルエヴィチが信仰自由の立場から手がけた宗教セクトに関する長いあいだの研究と経験がこの訓令のすみずみに生命を与えたことは否定できない。

ボンチルブルエヴィチの長い人生を概観すると初期の長い党地下活動から、宗教セクトの研究、政権当局者としての繁忙な政治生活、第二次戦後の無神論プロバガンダの展開と時期的に容易に区分され得ることになったジャンルの活動を見るのであるが、しかしこれが相互に連関し、社会主義イデオロギーにおける信仰の自由を基軸として整序されていることを知る。

結論として、彼は社会主義体制下における宗教政策をよく展開したところの顕著な功績をもつ偉大な人物の一人であり、特に目立った業績として第二次大戦後の無神論プロバガンダが、ヤロスラウスキーの戦闘的無神論者同盟<sup>(7)</sup>とともにソ連邦の宗教政策を輝かしいものにした双壁と言えよう。それゆえ、これをもし、宗教社会という荒海を航海するソ連邦の船にたとえて見るならばさしづめその船長はレーニンであり、一等航海士はヤロスラウスキー E. M. Ярославский であろうし、そして個々の実際的問題解決の事前の衝につねに当たっていたという意味でボンチルブルエヴィチは一等機関士に当ると言えよう。

- (1) Научно., Там же. стр. 5
- (2) Ю. Я. Козан, Там же. стр. 21
- (3) Там же.
- (4) М. М. Персиц, Отделение церкви от государства и школы от церкви в СССР, Москва, 1958, стр. 110
- (5) Там же. стр. 113

- (6) M. M. Персиц, К истории отделения церкви от государства и школы от церкви в СССР, — в кн.: Вопросы истории религии и атеизма, сб. V, Москва, 1958, стр. 19. Кенчи＝ブルエヴィチに限らず、革命当初は誰でも一人何役も兼職することが多かった。

- (7) 拙稿「ヤロスラウスキーの政治と宗教」——早大社研編『ソ連東欧社会の展開』（昭和四五年）（亜紀書房刊、一四一頁以降参照）

(附) ボンチ＝ブルエヴィチの主たる著作

——宗教・無神論関係のもの——

- (1) Животной книге, 1899
- (2) Материалы к истории изучения русского сектантства, вып. I—VII, 1901—1909
- (3) Духоборцы в канадских прериях, 1901—1902
- (4) Раскол и сектантство в России, 1903
- (5) Силы русского клерикализма, 1903
- (6) Стоимость культа по сметам государственного бюджета и отчетам обер-прокурора св. синода, 1913
- (7) Отделение церкви от государства и школы от церкви, 1917
- (8) Живая церковь и протестантизм, 1923
- (9) Роль духовенства в первые дни Октября, 1930
- (10) Свобода совести в СССР, 1954
- (11) О научно-атеистической пропаганде, 1955
- (12) Габон и габонызм, 1955

(備考)

- a. 邦訳『ボンチ＝ブルエヴィチの政治と宗教』、ред. колл. В. И. Р. А., Владимир Домитриевич Бонч-Бруевич—в кн. Вопросы истории религии и атеизма, сб. III, М., 1956. を中心として他の二三編の文中記述をより整理した。

- b. 膨大な数の文学評論、文芸エッセイなどは省略した。

※

本論文は昭和四五年一〇月一七日早大社研・ソ連東欧部会でなされた研究報告にその後多少の手を加えたものである。  
なお、これは昭和四四年度文部省科学研究費補助金（一般研究D）の交付をうけた研究の一部である。